

# 緒 言

本年2月24日、ロシアが隣国のウクライナに「軍事侵攻」した。今日で16日目を迎えたが、いまだ停戦に至っていない。当初は簡単に降伏すると見られていたウクライナ軍だが、頑強に抵抗し続け、首都キエフもまだ陥落していない。やはり、祖国防衛のもとに立ち上がった人々の力は強い。ウクライナのゼレンスキー大統領は徹底抗戦を訴え、西側諸国に兵器の補給を呼びかけている。すでに3回の停戦交渉がおこなわれたが、不発に終わった。それでも第4回の停戦交渉の開催が模索されている。激しい戦場の画像が身近に見られるなど、21世紀型の「戦争」である。暴走するロシアのプーチン大統領を止めることができる人物はいないのか、いま、ウクライナ情勢から目が離せない。今回のロシアのウクライナ侵攻が将来、歴史的な転換点となったと回想することがあるかもしれない。

また、新型コロナウイルスの感染がなかなか終息しない。特に今は、オミクロン株という感染力のきわめて強いウィルスが原因で新規感染者が一段と増え、それが全国的な広がりを見せている。すでに2回のワクチン接種を受けた国民に対して、感染を予防する効果があると、3回目のワクチン接種が推奨されている今日この頃である。

さて、このたび『内海文化研究紀要』第50号を刊行することができた。昭和48年(1973)3月の創刊号「発刊の辞」には、今日の内海文化研究施設の前身にあたる「内海文化研究室」が広島大学文学部の附属施設として昭和47年度に誕生した経緯と今後の事業計画について述べている。それによれば、「内海」とは瀬戸内海を囲む地域のことであり、広島大学文学部では、各研究室それぞれの分野(歴史学・地理学・考古学・国語国文学)から「内海文化」に深い関心を持ち、研究を進めて成果をあげ、学界に提供してきたが、それらを総合的に把握するために、当時の文部省その他関係方面に要望してきた結果、設立が認められたという。

主な事業計画としては、(1)基礎的資料の蒐集・保存、(2)分野別研究と並行して共同研究の実施、(3)研究成果報告および研究文献目録などを掲載した紀要の刊行などを行うこととし、同年7月～8月に芸予諸島の中心にある愛媛県大三島をフィールドとして共同学術調査をめざしている。

このたびの第50号に論考をお寄せいただいた岸田先生は、学生(大学院生)として、内海文化研究室が発足した当時の学問的な動きを直接肌で感じておられたと拝察する。その後半世紀を経て、人文学を取り巻く学問環境も随分変わったと思われるが、研究の方法論など基本的に変わらないものもある。

創設50周年を迎えた今こそ、原点に立ち返って、本施設が果たすべき社会的責任を自覚しつつ、新たな一步を踏み出していかねばならない。

2022年3月11日

広島大学文学部附属内海文化研究施設  
施設長 本 多 博 之



# 目 次

## 緒 言

京都盆地南部の旧巨椋池周辺に認められる変動地形と

伏見湊の普請……………後藤 秀 昭………… 1

活断層地形調査における数値地形データの取得と活用

－高縄山地東縁の川根断層を事例として－…………山中 蛍・後藤秀昭………… 13

岩国市立岩国学校教育資料館所蔵和古書分類目録

－「文書類」資料の部－…………妹尾 好 信………… 25

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十六）…………久保田 啓 一………… (29)

景初四年改元考

－三角縁神獸鏡景初四年銘文の謎を解く（一）－…………陳 翀………… (21)

大内義興の死と備芸石の動乱

－享禄二年の安芸松尾城の高橋氏攻めと毛利元就－…岸 田 裕 之………… (1)

( ) は縦組で裏表紙から